

# 別記事 特記

## ピョートル・ベチャワ、 将来のヴィジョンを語る 夢を生きる現代のスター・テノール

取材・文 中東生  
Takashi Shinohara Nakai

「音楽の友」では数カ月前に、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場に出演中だったベチャワの取材を試みた。しかし、いまや押しも押されぬモセメテノールとなったベチャワとスケジュールが合わずに、残念ながら、そのときは取材できずに終わった。この度、チューリヒにおいで、インタヴュー取材が実現した。インタヴューの中東生さんはかつて本誌でベチャワのインタヴューを行ったことがある。

### 立て続けの受賞

2007年に本誌で「将来注目のオペラ歌手取材」を依頼された際、当時日本では無名に近かったピョートル・ベチャワを紹介した。その後、彼が世界的テノールに数えられるようになるまでのスピードには目を見張るものがあった。2014年に「エコー・クラシック」の最優秀男声歌手賞を受賞した際には、他部門受賞者だったヨナス・カウフマンが、テレビ放映される授賞式の直前に無言でミューンヘンを発つたため、「ベチャワと同じ舞台に立つのを避けたのか」と憶測されたりもした。そのベチャワの声が、最近いっそう確信を持って輝いていると感じていたところ、「インターナショナル・オペラ・アワード」と「ヨーロッパ文化賞」を立て続けに受賞した。そこで11年ぶりにインタヴューした。

「この度は受賞おめでとうございませぬ。」「インターナショナル・オペラ・アワード」

### Piotr Beczala speaks about his vision.



ピョートル・ベチャワ(T)

1966年、ポーランドのチェホヴィツェ・ジエジツェ生まれ。カトヴィツ音楽大学で声楽を学び、1996年、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》のドン・オッターヴィオ役でチューリヒ歌劇場にデビュー。ここを本拠に活動を開始する。1997年からチューリヒ歌劇場のメンバーとなり、ヴェルディ《椿姫》のアルフレード、モーツァルト《魔笛》のタミーノなどで出演。2006年、ヴェルディ《リゴレット》のマントヴァ公爵でメトロポリタン歌劇場にデビュー。以降、スターダムを駆け上がり、現在では世界を代表するリリック・テノールの一人。

歌手たるもの一度舞台上に立つたら、声のことで聴衆に怖れを感じさせてはなりません

「下は3度目のノミネートだったので、ニューヨークで歌っていたので授賞式には出られませんでした。個人的には賞に重きを置いているわけではありませんが、われわれの仕事はなかなか功績が計れないので、こうして認めていただくと手応えを感じます。そして、夢見ていた世界の歌劇場で歌えるようになった今では、受賞によって現在の自分の役割を果たしやすくなることに意義を感じます。その役割とは、音楽を通してメッセージを発する親善大使のような存在です。過去には音楽が政治的に悪用された時代もありましたが、逆に、だからこそ、政治的にはニュートラルな立場で、人と人をつなぐべきなのです。例えば祖国ポーランドの音楽をどんどん紹介していきたいと7年間活動した結果、アン・デア・ウィーン劇場で、ポーランド国外の一流歌劇場としては初めて、ポーランド



練習を十分に積み重ねてから舞台に立つという、きわめて真面目で慎重な性格

のオペラ《ハルカ》(モニニューシユコ作曲)を上演してくれる運びとなりました。リーダーアーベントでも必ずポーランド人の作品をプログラムに入れます」

## リーダーアーベントと「ウエルテル」

——先日のリーダーアーベントでも、ポーランド人のミエチスワフ・カルウオヴィチ(ポーランド語ふう)にミエチスワフ・カルウオヴィッチと発音を直してもらった)の歌曲では、スラヴ的なメランコリーとドラマティックな歌い回しが際立っていました。ソニーヤ・ヨンチェヴァの代役だったあの晩は、貴方をよく知るチューリヒ歌劇場の聴衆をも、改めて熱狂させるほどの成功を収められましたね。

「本番3日前に、ちょうどマスネ《ウエルテル》の稽古のためニューヨークからスイスへ帰って来た時に、代役依頼の電話をもらいました。伴奏のアン・キャリィ・マトソンとはアメリカでコンサートもしているのので引き受けましたが、翌日

から稽古スケジュールがビッシリ詰まっていることを忘れていたので、最後は風邪をひいてしまいました(苦笑)」

——明日の《ウエルテル》を観に行きませんが、貴方のウエルテルは、この演出での初演を歌ったファン・ディエゴ・フロレスを始め、一般的なウエルテルより英雄的な傾向になると思うのですが。

「その通り。まさに僕は、ウエルテルはもっと英雄的であるべきだと思っています。もちろん彼はエゴイストで、自己陶酔的な性格ではありますが、精神的にはアクティヴで破壊的で、内面的緊張感では文学史上の一種の英雄だと思つので、あまりベルカントに歌ってはいけなと思うのです。この役は1994年のリンツ歌劇場の専属時代から歌っており、今までに7〜8通りの演出で歌っています。僕は、文学的に意味のある役は、繰り返し演じるのが好きなのですが、それは回を重ねることに、より深い人間性を表現できるようになるからです」

## 毎日練習

——このところのベチャワさんの声は、さらに確実な輝かしさを増していると感じるのですが、何か変化があったのですか。

「ヘルムート・ドイチュ(ピアニスト)に出会ったことでしょうか。彼からは歌曲に内包されている世界を表現する勇氣を学びました。また、クリスティアン・ツィメルマンの先生だったアンジェイ・ヤシンスキからも、簡単なフレーズの中に

でも、ピアニツシモや柔らかい表現を極限まで追求することを教わりました。それはオペラでは許されないことですが、リーダーアーベント限定で実践できることで、それによって、オペラを歌うときにも柔軟な声で歌えるようになりました。歌手たるもの一度舞台上に立つたら、声のコンディションの事で聴衆に怖れを感じさせてはならないというのが私の哲学です。一般に言われる『グラディエーター症候群』のように、ハラハラしながら、高音が出るか心配し、『あー、無事に出来良かったね』というのではダメです(笑)」

——ダメだと思つても、そうなつてしまふ歌手たちがいる中で、それを実現できるためにはどんな秘訣があるのですか。

「それは毎日練習していますから!自分にとつて難しい箇所は、十分練習して本番に臨むので、確信を持って舞台上に立ちます。実は、僕は技術的問題をたくさん抱えていました。今でもまだあります。練習中も、本番後も解決法を探し、どんな小さな傷も見逃さず、修正します。ヴァイブラートの変化にも注意を払い、艶のないバツサツジョや母音もチェックします。傷はすぐ直せるのですが、放っておくと取り返しのつかないことになるからです。『まあ、なんとかなるさ』と舞台に出て行く同僚がいますが、それではなんとかならないのです!」

## ヴェルティの役を視野に入れる

——11年前に将来の夢を尋ねたら、「今、



「インターナショナル・オペラ・アワード」の授賞式でチューリヒ歌劇場総裁アンドレアス・ホモキ(右)と。《ウエルテル》の演出による弾痕と血潮が生々しい

夢を生きている」とおっしゃいましたが、そのような努力の上の夢なのですね。

「今も、夢を生きています! それも常により良い夢です。普通は半歩ずつ進むような歩みを、今は2、3歩ずつ進んでいるような勢いがあります。来年の2月にはプッチーニ《トスカ》のカヴァラドッシでデビューします。次は《アイーダ》のラダメス、《トロヴァトーレ》のマンリーコと、ヴェルティの役を視野に入れています」

——貴方はそのイタリアニタ(イタリア的な声や歌い直し)をどう獲得したのですか。

「一部分は生まれ持ったものですが、原語からくる音楽的スタイルを習得することに努力を注いでいます。この街チューリヒには大指揮者ネッロ・サンティが住んでいます。彼と長い時間議論した際、『イタリアニタとは、明瞭な響きで楽譜に書かれていることを歌う』のみだと言われました。これからもっとその道を進んでいくつもりです」